

2026 年 新年の干支 「丙午（ひのえうま・へいご）」に思う

－ 燃えるような情熱と、勢いよく駆け上がる力を象徴する年!! －

木材・住宅業界の新たな市場領域を創造する多角化戦略

株式会社 山西 あすなろ会顧問
代表取締役会長 西 垣 洋 一

新年を迎え謹んで新春のお慶びを申し上げます。
旧年中はあすなろ会の皆様には、格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

2026 年の干支は、「丙午」になります。「丙」は、十干における三番目の要素で、五行では「火」、陰陽では「陽」に分類されます。これは、太陽や燃え盛る火を象徴しており、「盛んになる」「明らかにになる」といった意味合いを持ち、万物が明るく照らされ、その姿がはっきりと現れる状態、活動的で情熱的な気を表します。「午」は、十二支の一つで、五行では同じく「火」に分類されます。季節で言えば夏の盛り、時刻で言えば正午を指す文字で、「行き違い、交差」という意味から転じ、植物が成長の勢いを最高潮に達し、茂りすぎた状態、躍動的で勢いのある性質を持ちます。このように、陽の火である「丙」と、火の要素を持つ「午」が組み合わさる「丙午」は、火の気が非常に強く重なり合った状態と言えます。そのため、2026 年の干支「丙午」は燃えるような情熱と勢いよく駆け上がる力を象徴する年とされています。

昨今の世界経済に目を向けますと、インフレの上昇傾向を抑える金融緩和への期待や、AI 関連技術への旺盛な投資が成長の強力な推進力となっています。これらの要素が、2026 年にかけて経済を力強く押し上げる高成長シナリオの可能性を秘めています。一方で、高市内閣の「責任ある積極財政」は、“有事への備え”を名目に財政支出を拡大し、金融緩和を続けるため、為替円安を助長し物価高騰を加速。同時に、この積極財政による経済安全保障投資と防衛力強化は、対中強硬姿勢を具体化し、日中関係の緊張を格段に高める要因となっています。こうした国際協調の難しさから生じる地政学的な緊張や、各国間の保護主義的な政策の拡大は、引き続き大きな下振れリスクとして潜めています。したがって、今後の世界経済の見通しとしては単なる「緩やかな成長」に留まらず、これら両極端な要因の綱引きにより、安定か、過熱か、あるいは不安定な停滞かという、より複雑な局面を迎えることが予想されます。

我々木材・住宅業界においても、グローバルなサプライチェーンの変動、脱炭素化社会への潮流、デジタル技術の革新、そして少子高齢化等による新設住宅着工数の減少等、構造的な変革の波に直面しています。こうした背景のもと、従来の木造化・木質化を伴ったビジネスモデルを着実に推し進めると共に、新たな市場領域を創造する戦略的な多角化が、業界全体の喫緊の課題となっています。例えば、

- ① 非住宅市場に「木造化ソリューション」という新たな領域の創出
- ② 木材の機能的価値から健康や生産性向上を提案する「ウェルビーイング市場」との融合
- ③ 製材端材を CNF（セルロースナノファイバー）やバイオ燃料などの高性能素材への変換
- ④ 環境貢献を企業の社会的責任（CSR）に留めず、新たな事業活動への展開
- ⑤ 地産地消のサプライチェーンを通じた地域経済の活性化への貢献など、

木材産業の多角化・多様化は、単なる材料選択の幅を広げるだけでなく、現代社会が抱える多くの課題、すなわち地球温暖化対策、地域経済の活性化、資源の持続可能性等に対して大きく貢献します。今後、これらの技術がさらに進化し普及することで、木材は「未来を築く素材」として、より持続可能で豊かな社会の実現に不可欠な役割を果たしていかなければなりません。

最後になりますが、本年の干支にちなんだ格言（右図 参照）をご紹介させて頂き、皆様のご健康と事業発展を心から祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

2026 年 1 月吉日

◆ 干支の智慧 — 丙午（ひのえうま・へいご） —

『本年の干支は、「丙午」になります。陰陽五行では「丙」は陽の火、「午」も陽の火で、同じ気が重なった比和という状態となり、一気呵成に勢いづき、物事を進める力強さがあるとされています。又、十二支でも真ん中に位置することや、馬をなぜ午に当てるようになったかは不明ですが、角が出ているのが「牛」で、出ていないのが「午」などとも言われ、午という字は「逆らう」を意味し、物事の転換期である状態を表すともされます。令和 8 年は、国内外の社会情勢の混迷や、政治経済の先行き不透明など、不安な部分もありますが、ビジネスにとって変革はチャンスとも言えます。馬ならではのスピード感あふれる力強さを存分に生かして突き進めば、必ず開けるものはあるはずです。人間万事塞翁が馬、細かいことに動じることなく、どっしりと構えて、馬力いっぱいの一年としたいものです。』



◆ 干支の格言 （“午(馬)”にちなんだ諺・経営語録）

・「一馬の奔（はし）る、一毛の動かざるは無し」

一頭の馬が走ると全身の毛が動くことから、先頭に立つ者が行動すると、部下も一斉に動くことを指す。全体が一つの方向をしっかりと向き、迅速に動く組織は強固であるという意。

・「汗馬（かんば）の労」

馬に汗をかかせるほど努力をしたり、他人のために苦勞を惜しまず働くことを指す。自分のことばかり考えず、他人にも気を使い、時には手助けすることの大切さを説く。

・「驥（き）も一日に千里となると能（あた）わず」

いかに名馬でも日に千里行くわけにはいかない。一方、駄馬でも十日歩み続ければ同じ距離まで達することができる。このように何事も一足飛びに進むことはできないというたとえ。

・「老馬の智」

経験を積んだ老人は、目立たなくても確かな知識と知恵を持っており、困難な状況で頼りになるということ。若い優秀さだけでなく、年月を経た知恵の価値を示す教訓。

・「千里の馬は常に有れども、伯樂（はくらく）は常には有らず」

才能のある人物（千里の馬）はいつの時代にもいるが、その才能を見抜いて正しく評価し、使いこなせる人物は中々いないということ。有能な人材を発掘・登用することの難しさを示す。

・「癖ある馬に能あり」

一癖あるくらいの者のほうが役に立つ。ただおとなしいだけではものの役に立たない。どちらかというと、暴れ馬のくらいのほうがいざというときに役立つということ。

・「驥足（きそく）を展（の）ぶ」

すぐれた人がその非凡な才能を力いっぱい振るうこと。驥足は駿馬の脚力のこと。